

年次研修者振り返り

1年次 国語科 塚越 麻友美

第1学年および第2学年の「国語総合」の授業では、現代文（評論・小説）、古文、漢文の3分野をまんべんなく扱った。生徒の読解力については一朝一夕に養えるものではないため、今後も継続的なアプローチが必要である。例えば漢字指導や語彙指導、教科書本文の段落相互の関係性の読み取り、特に古典分野において省略部分を補いながら読む方法を指導するなど、様々な方向から生徒の読解力を培っていききたい。

今年度、授業を行うにあたって留意した点は2つある。1点目は、ICTの利活用と板書のバランスである。本校では、書字に苦手意識を有する生徒が多く在籍している。スライドを用いて、とりわけ重要な部分だけをプリントに記入させながら授業を行うべきか、国語の授業であるからこそ書字が苦手な生徒にも、速く、正確に書かせるトレーニングをするべきか、悩み続けた1年間であった。スライドは教師が板書している時間を削減したり、Teamsで共有することで生徒の復習に役立たせたり、翌年以降もアップデートを加えながら利用できたりするメリットがある。一方で、発言した生徒の意見を即時的に反映させることは難しく、事前に準備した通りの文言が表示されてしまうという点を大きなデメリットに感じている。そのため、今年度はスライドの利用は補足説明や、発展的な内容を扱う場合に留まってしまった。来年度からは1年生が一人1台の端末を有することになるので、より効果的なICTの活用方法を考えていきたい。

2点目は、生徒の集中力を50分間継続させるために発問や活動を短く切ったことである。教師側から見ると当然理解しているであろうと考えてしまうようなことでも、あえて確認のために問いかけることで全体の理解を促したり、「いつ指名されるかわからない」という緊張感を持たせ続けたりするようにした。また、簡単に答えることができる問いのみではなく、既習事項を踏まえてじっくり考えれば正解にたどり着ける問いを立てることで、「答えることができた」という生徒の前向きな気持ちを引き出せるように努めた。年度当初に比べて、指名された生徒が答えようとする意欲ばかりではなく、全体への問いかけののちに自ら挙手をし、積極的に発言する姿勢を見せる生徒が増えてきたことを実感している。今後も生徒が教材と自分自身との対話を通して考えを深めていくことを期待したい。一方で、他者の意見を聞いた上で、自身の思考を練り上げていく活動には課題が残る。学習指導要領改訂の趣旨を踏まえて、生徒自身が学びに向かう意志を持てるような指導をするべく、常に研究と修養に励みたい。

右も左もわからないまま始まった教員生活でしたが、1年間どうにか駆け抜けることができたのは、懇切丁寧な指導をしてくださるとともに、私の取り組みを温かく見守ってくださった先生方のお蔭です。深く感謝申し上げます。